学会参加報告

第64回日本小児保健協会学術集会に参加して

西原町役場　健康支援課
保健師　下　門　健　人

『すべては子どものために ～ All For the Children ～』と銘打って大阪で開催された学術集会に光栄にも参加させて頂きました。保健師となり５年、母子保健分野を担当しちょうど１年が経過し、右も左もわからない状態で突き進み、子どもたち、そして保護者に教わりながら学びを深めてきました。そんな時に沖縄県小児保健協会の方にお声かけ頂き、本学術集会では多くの貴重な学びをさせて頂きました。本機関誌を手に取られた諸先輩には大変恐縮ではございますが、本学術集会を体験して私自身が変化した部分を皆さんにも感じて頂き、それが少しでも、皆さんへの刺激になるのであれば嬉しく思います。今回は、“子ども達の為に何ができるのか”という熱い思いを持って生きている方々に直接触れる事が、どんなに貴重で、重要な事だったかを皆さんにお伝えできればと思います。

初めてプログラムを確認した時の最初の感想は“いろいろありすぎる…”でした。目につく演題は現場で向き合っている「発達障害」や「虐待」「子育て支援」。もちろん、その部分に関しての演題内容は非常に参考になるものでした。“今”自分が行っている業務での子どもや保護者との関わり方、視点の多角性など、今の自分のスキルを高める為には何が重要なのかという部分について非常に良い刺激を受けました。

また保健師として活動するうえでは“しっかりとした根拠に基づく指導”というのがベースです。例えば「低出生体重児予防の為のやせ妊婦・喫煙妊婦への指導」これも多くの根拠が積み重なったものです。根拠の積み重ねで信頼性を得た事柄は文献となり、私たち専門職者の指導バイブルとなっています。大手自動車メーカーの電気とガソリンを使った車のキャッチコピーに「すぐ普通になる。今は特別な〇〇〇。」をご存知でしょうか。今回の学術集会では、私からすればほとんどが“特別なもの”でした。しかし、ここで刺激を受けた人が更なる根拠を積み重ねる事によって、それが“普通”となり、今よりもレベルの高い『すべて』となり、『子どものために』なるのではないでしょうか。

「保健師としてそっちの世界にいってみたい」というワクワクする思いが湧き上がっていた帰りの飛行機の中を思い出します。日々、業務に追われる中、業務の改善や質の向上、新しい事への挑戦。これらは生半可な気持ちではなかなかできません。しかし、“熱い思いを持つ人に触れる”ことでその人の熱が伝わり、それが自身を突き動かす原動力になる事を感じる事が出来ました。まだまだ未熟な私がこういう事をこの様な場で述べさせて頂く事は大変恥ずかしく思いますが、刺激を受けた者として、この刺激を皆さんに伝えたいと思います。

“刺激”という意味合いで言えば、沖縄県小児保健協会理事の先生方からも多くの刺激を頂きました。日本酒のいろは、うるま市の美味しい沖縄そば屋、ドイツビールの楽しみ方、一次会（日本酒）からの二次会（ドイツビール）への流れは最高でした。また、先生方とお話が出来るよう、自身に更なる磨きをかけ日々頑張りたいと思います。

結びになりますが、学術集会への参加は自分自身の足元、立ち位置を確認することができ、また自分が立っているその空間には多くの可能性があることを感じさせられ、更なる上を見上げるきっかけを与えて頂きました。この様な機会を与えて頂きました沖縄県小児保健協会の皆様、またご協力いただいた西原町役場の皆様へはこの場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

学会参加報告

第64回日本小児保健協会学術集会へ参加して

宮古島市　健康増進課
保健師　平　良　礼　子

「すべては子どものために～ All For the Children ～」をメインテーマに、大阪府で開催された小児保健協会学術集会へ、参加させていただきました。

初日は、学術集会とは、別メニューで、大阪府立母子医療センターの施設見学会に参加しました。施設見学前に、佐藤拓代先生から、医療センターの概要の説明がありました。産婦人科・小児科の基幹病院としての役割を担い、母子保健情報センターを設置し、情報の集約・分析・支援等、幅広く活動しており、大阪府から委託されている「にんしんSOS」事業では、大阪府から派遣された保健師２名と病院側のスタッフとのチームで、出前型の支援を実施している等、先駆的な内容に、驚きました。また、施設見学では、検査や治療の不安軽減のために、子ども目線での工夫が様々な場面でなされており、また地域のボランティアの協力もあり、子どもやお母さんを支えるための熱意を感じました。

研修２日目、会頭金子一成氏の挨拶で、今回のテーマについて、「子どもは社会の希望であり、未来の力です。生を受けた子どもたちが病気になったとき、私たち皆がサポーターになってあげたいという気持ちと、自分達が日頃行っている事が、本当に子ども達のためになっているのか、問いかける意味もあり、すべては子どものためにというテーマにしました。」という説明がありました。会場に集まった多くの参加者、医師・保健師・心理士・看護師・その他職種の人達が、同じ思いを胸にこの集会に参加しており、私もそのうちの一人だと思うと、感動を覚えました。

研修会は、５つの会場で、同時進行で、講演会、シンポジウム等が行われ、どのテーマも興味深く、選択に迷ったりしました。

特別講演「子どものために小児医療・保健従事者ができること」の中で、子どもの健康は、社会の影響が大きく、貧困がもたらす子どもへの影響も大きい（例えば生活習慣が身に付きにくい等）という話がありました。全国に比べ、子どもの貧困率が高い沖縄、教育・福祉・保健からどう支援していくか、難しい問題だなと感じました。また、子どもの健診について、アメリカでは、乳児期に７回、12か月から30か月では５回、３歳から21歳までは、年１回の健診を個別で実施しており、10歳から21歳は、思春期として、診察は小児科で行っているという説明がありました。日頃の業務の中で、10代の妊娠や望まない妊娠など、思春期を取り巻く課題を感じており、アメリカの乳幼児、思春期に対しての取り組みは、丁寧でうらやましく思いました。

３日目の「乳幼児健診のポイント」の講演会では、日頃の健診へどう臨んでいるか、改めて、考えさせられました。問診では、ゆっくり早口にならない、お母さんの顔を見て話す、「お母さん、頑張ってね」ではなく、頑張らない自然な育児を目指す。大丈夫の声かけがトラブルになることがある（100％の大丈夫はない）

健診の帰りがけ、不安そうな母親がいたら、医師、保健師、事務のうち気づいた誰かが声をかける。「乳幼児健診の基本は、笑顔で返すのがプロ」

乳幼児健診は疾患や障害を見つけることだけではなく、広い意味での子育て支援であり、そうした認識を持って乳幼児健診に携わることが望まれる。この講演を聞きながら、日頃保健師として自分は、お母さん達に、どんな声かけをしているんだろうと、振り返る機会となりました。それと同時に、健診の

原点を確認できた思いで、新鮮な気持ちになりました。

その他「ターニングポイントを迎えた小児アレルギー疾患の治療と予防」では、妊娠中の母親の食事制限は、子どもへのアレルギーへは、関係ない、アレルゲン回避を可能な限り実行しても、有意差はない、離乳食は早く始めたら、アレルギー反応が出やすいということは言えない等、今までのアレルギーに対する保健指導を見直さないといけないなと感じました。最後の市民公開講座「発達障がい児の地域支援」では、名張市市長が、熱い言葉で子ども達への支援を語っていたのが印象に残りました。

この頃、マンネリ化している保健師としての自分に気づき、どうにかしないといけないという思いがありました。そんな時、この研修に参加することができて、大きな刺激と、パワーをもらうことができました。この研修で学んだこと、感じたことを、これからの保健活動に活かしていきたいと思います。

最後に、このような貴重な研修の機会をあたえていただいた沖縄県小児保健協会の皆様に深く感謝申し上げます。

ホテルから会場まで、約10分。途中、橋の上から会場を撮影